

新人紹介

2025年4月、WMOでは5名の新入社員を迎えました。

◇ ◇ 山崎 稜平 ◇ ◇

初めまして。本年度よりワイルドライフマネジメント事業部関東支社に配属になりました、山崎稜平（ヤマザキ リョウヘイ）と申します。よろしくお願いします。

私は非常に多趣味な人間です。アウトドアでは登山やキャンプ、ダイビング、サイクリングやランニングを楽しんでおり、最近は釣りにも興味に向いています。インドアでは映画やアニメの鑑賞、DIYや小物制作などの立体物から、イラストや小説の執筆など平面物の幅広い創作、もちろん生き物と接することも好きで、生物飼育では現在はアリのコロニー飼育を、最近は盆栽にも挑戦しています。また美味しい食べ物やお酒を楽しむことも大好きです。私は好奇心と行動力が高いようで、何にでも興味を示し、手を出し楽しみ、しかし極める時間もなく、ウロチョロ走り回っているような人間です。

振り返れば、生き物好きは幼少の頃からでした。母の影響もあり、カブトムシの継代飼育をしたり、



2023年9月、富士登山中の山崎。ここ数年は各所の後輩を連れて毎年登っています。

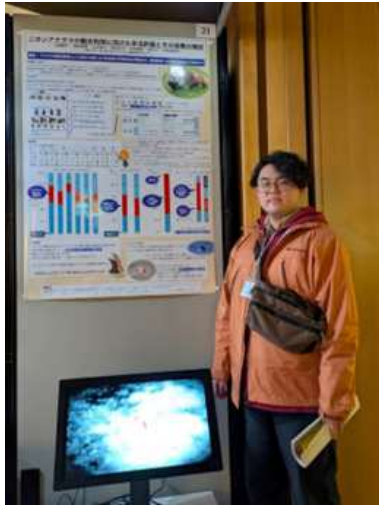
動物園や水族館によく足を運び、動物番組や図鑑を漁り、生き物に接することが大きな喜びとなっていました。祖父母の家の裏山から時々姿を現すシカやイノシシなどの野生動物を観察する機会もあり、また父の影響で始めた登山やキャンプなどのアウトドアの趣味も相まって、野生動物の”野生下で逞しくイキイキと生きる姿”に、次第に心を打たれていきました。高校に入り、野生動物について知識を深める過程で、人間社会との衝突や軋轢が生じ、問題になっていることを知り、何とかしたいと思うようになりました。

大学を選ぶ際、先述したような多くの趣味や好きなことから進路を考えましたが、そのほとんどが「仕事にしてしまったら、きっと楽しめない」と感じるものでした。しかしその中で唯一、仕事として取り組む覚悟を持ち、”本気”を向けつつ楽しめると思ったのが、野生動物に関わる仕事でした。また高校の教員から「大学で選ぶ前に、先生で選ぶ手もある」という言葉をいただき、野生動物と人間社会の軋轢を減らすための研究や論文を調べた時、のちの恩師となる塚田英晴教授と野生動物学研究室を見つけ、麻布大学に進学することを決めました。

麻布大学野生動物学研究室では様々な野生動物の痕跡や生態、調査技術を学び、そのまま進学した修士課程でより専門的な調査解析手法、最新研究、科学的な視点、そして本質を見据えることの大切さを学びました。卒論・修論ではニホンアナグマの行動と気候、時間に関わる基礎生態の解明と、観光事業への応用の可能性、ドローンによるアナグマの発見観察可能性について検討しました。

人間社会と野生動物との軋轢を軽減したいという強い想いのもと、WMOでは持ち前の好奇心、行動力、そして覚悟を持って業務に携わり、以前

は眺めるだけで幸せだった野生動物という存在を、これからは彼らの暮らしも尊重できる人間社会の実現に向け、これに少しでも貢献できるよう、自分の時間を捧げたいと考えております。まだまだ世間知らずな未熟者ではございますが、戦力になれるように頑張っておりますので、何卒ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします！



2025 年 1 月、修論を外部でポスター発表する山崎。
デスクワークとストレスで激太りしました。

◇ ◇ 竹腰 直紀 ◇ ◇

はじめまして。本年度からワイルドライフマネジメント事業部関西支社に配属となりました、竹腰直紀です。最近ほとんど行けていませんが、趣味は登山です。また、食べることも好きで、時間のある時は近所の個人経営のレストランやカフェを巡るのも好きです。

出身は長野県です。父方の実家では祖父と父が稲作をしており、夏には畦の草刈り、秋には稲刈りの手伝いが毎年の恒例行事のようにあり、定期的に自然に触れる機会がありました。実家の田んぼも山のふもとにあり、防災無線でクマ出没の放送を聞くことも珍しくありませんでした。また、地元のテレビではクマの捕獲頭数や出没についてのニュースも度々目にしており、少し怖いと感じる部分もありましたが、一方で「クマの出没は捕

獲だけで解決するのか？」と素朴な疑問も抱いていました。そのことが、クマの生態に関心を持つきっかけでした。しかし、大学受験に臨んでいた当時は農業分野を志望しており、ツキノワグマに特別な思いを抱いていたわけではありませんでした。結果、第一志望は不合格となってしまう、紆余曲折を経て東京農業大学の森林総合化学科に入学しました。率直に言って、入学当初は森林や生態学への志は高くありませんでしたが、研究室に配属される前のタイミングでクマの行動生態を専門にする山崎教授がいらっしゃることを知り、クマの生態研究を卒論として取り組みたい想いが強くなり、同期・先輩や周囲の助けも借りながら、クマの世界へのめり込んでいきました。

卒業論文から修士論文にかけては、野生のツキノワグマの行動と栄養状態はどのような関係性にあるのかを研究しました。クマを捕獲せずに、胸部斑紋を撮影して個体を特定しつつ、台秤に乗せて体重を計測するという、前例のない調査手法を試行錯誤しながら確立することが、この調査研究で直面した最も大きな壁の一つでした。また、GPS 首輪を付けたクマの体重が測れないと、行動と体重変化を突き合わせるができないので、特定の個体が狙い通りに何回も台秤に乗ってくれるか分からないという賭け要素も大きい調査研究でした。結果をまとめるのにも苦労しましたが、最終的に新知見を得られたことを論文としてまとめられたことは非常に嬉しかったですし、自信になりました。

博士論文研究でもツキノワグマを対象として、オスの男性ホルモンと行動変化との関係性を研究しました。調査では GPS 首輪を付けたオスグマをひたすらストーキングし続けて糞を採取し、糞に含まれるホルモン代謝物を抽出・測定しました。調査自体は単純な作業でしたが、分野は行動と繁殖をまたいでいることや、糞の落とし主を特定するために遺伝分析も行っているため、分野横断的に作業をこなしながらそれに必要な知識を身に着けることにも大変苦労しました。お恥ずかしなが

ら、現在も結果を論文にまとめている最中であるため、当研究には現在進行形で悪戦苦闘中です。しかしながら、思い返してみれば、卒論から博論にかけて異なる分野に同時的に関わることができたことは何にも代えがたい貴重な経験だったと思います。

以上のように、学生時代はフィールドから分析まで広く浅くいろいろな分野に関わっていたため、その経験が自身の強みの一つだと自負していました。しかし、当社に入社して以降は、さまざまな方々から「何か一つの強みをもつこと」の重要性についてのお話を伺いました。今後、当社では研修を受けながら様々な業務に携わらせていただくことになるかと思いますが、その経験を通して、私にとって今後のキャリアの軸となる分野・スキルは何なのかを探して行きたいと考えています。至らぬ点が多々あるかと存じますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

◇ ◇ 櫻木 正太 ◇ ◇

はじめまして。本年度からワイルドライフマネジメント事業部関西支社に配属となりました。櫻木正太と申します。宜しくお願い致します。出身地は香川県で、幼少期から両親によく動物園に連れて行ってもらっていた為、動物に関心を持つよ

うになりました。その後、中学生時代に受けた地理の授業内で野生動物による農作物被害の問題を知り、それをきっかけに将来は地域における獣害問題に携わる仕事をしたいと考えるようになりました。そのため、大学では里山のような人の生活圏と自然が交わる環境の現状について勉強をしたいと考え、京都先端科学大学のバイオ環境デザイン学科に進学しました。

大学では、座学での勉強の他に学有林や大学郊外でのフィールドワークを用いて、里山の現状と農村部が抱えている問題を直接目にして学習して参りました。将来、地域の獣害問題に携わっていく為には、銃の所持等の資格取得は必須であると考えていた為、部活動では射撃部に入部し、銃砲所持許可の取得と狩猟免許の取得に励んで参りました。また、学外の活動として NPO 法人の活動に帯同させて頂き、アユモドキの保全活動やサンショウウオの個体数調査等を通して、野生生物の保全活動と保全の重要性についても学んで参りました。そんな学生時代の中で、最も心に残っているのは、ムササビの夜間調査に帯同したことです。当時、まだコロナ渦であったということもあり対面での授業が少なく、それに伴って野外実習も少なかった為、なかなか思うように野外に出ることが出来ていませんでした。そんな中での野外調査であったということと初めて野生動物を目の前で



卒業研究で確認されたヘビ模型に反応するニホンザル

観察した経験であった為、その時の情景は今でも心に残っています。この経験から野生動物を直接観察する面白さ、山に入る楽しさを知り、頻繁に山に入って動物を観察するようになりました。

卒業研究では、「野生下におけるニホンザルのヘビに対する反応」というタイトルで、飼育下のニホンザルはヘビに対して強い反応を示すが野生下のニホンザルもヘビに対して強い反応を示すのかを研究しました。私個人としては、この研究結果から得られたことを今後の猿害対策として講じられないかと考えて始めた研究ではありますが、対策として用いるにはまだまだ改良の余地が見られる結果となりました。今後、私自身の仕事に対する技量が十分に上がり次第、WMOの自主研制度を通してさらなる研究を行い、この対策方法を実用的なものにしていきたいと考えております。

最後になりましたが、野生動物のプロ集団である WMO に入社できたことを大変嬉しく思っております。今後は、仕事を通して地域が抱える獣害問題に直接関わり、解決していきたいと考えておりますので、ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

◇ ◇ 島田 梨帆 ◇ ◇

初めまして。本年度よりワイルドライフマネジメント事業部関西支社に配属された島田梨帆（しまだりほ）と申します。

生まれも育ちも兵庫県で、大学生の時以外はこの地で生活しています。

好きなものは生き物、車（比較的無節操に好き）、旅行、運転、食べること。

趣味は創作活動（主に執筆）、ドライブ、ミニカーの収集、モータースポーツの観戦などです。

因みに愛車はロードスターです。

閑話休題。

私は今回、中途採用という形で配属が決まり、それ以前は鉄道会社でワンマン運転の運転士をし

ていました。ワンマン運転というのは車掌業務と運転業務を兼任する乗務員のことで、乗客への案内放送も各駅への輸送も基本的には一人で行います。ちょうど、本社最寄り駅の小宮駅を有する八高線と同じ形式です。

これだけを見ますと全くの異業種への転職ということになりますが、元々は生き物が好きな人間で、保育園での将来の夢は「魚」で（※実話）、小学校夏休みの自由研究は生き物のことばかり、トライやるウィーク（中学生向けの就業体験活動週間）では博物館を体験し、高校の社会人のお仕事調査のような授業では水族館職員の方に話を聞きに行き、大学は「動物のことについて、大学でしか得られない知見を得たいから」という理由で進学しました（尚のことどうして鉄道会社に就職したのか不思議ですね）。

進学先の東京農業大学の生物産業学部アクアバイオ学科（現：海洋水産課）では海獣類の漁業被害と対策について調査と卒論研究を行っていました。きっかけは、1年次に補助員として調査に同行したことです。入学してまだ間が無く知識も経験も浅かった私はそこで初めてそうした被害があることを知り、そして漁師さんの一人に「お前たちは外部の人間だから、どうせ俺たちの気持ちなんて分からないだろ」と言われてしまいました。結構グサツときたのですが、思えばこれが発破になった気がします。言われた言葉が悔しくて、「見てろ、その評価を変えてやる」となった訳です。

そこからは毎年1回は調査に顔を出し、4年次になってとうとう自分でフィールドワークのあれこれを回す立場になりました（それまでは先輩のアシスタントのような立ち位置でした）。

定置網漁船への同乗、漁獲高の聞き取りと記録、混獲個体の回収、解体作業の用意やサンプリングの事前準備、事後処理、センサス作業、教授への定時連絡、補助員として調査に参加してくれた後輩への指示や指導など、今思えばほとんど毎日ず

っと動き回っていた気がします。

その頃には最初の漁師さんともすっかり打ち解け、冗談を言い合えるような仲になっていました。また余談ですが、移動には車も必須だったので、運転経験の蓄積も一気に進みました（当時はまだ免許を取って間もない時期でした）。

話を戻しまして、その中で感じたのが「人間も野生動物もお互いにただ生きている（生活を営んでいる）だけで、元々は害意をもってそこに居た訳ではない」ということでした。両者の生活圏・行動圏が被ってしまうために、衝突が起こり、結果的に軋轢が生まれてしまう。お互いに“望ましくない”事態が招かれてしまう。

それがすごく複雑で、土地への愛着や漁師さんたちとの生活もあって「中途半端な卒論は書けないぞ」という気持ちも抱いていたことから、卒論の考察には苦心しました（今後の被害対策の方針や見解に影響を及ぼすことでもあったため、尚のこと）。

WMO への入社を決意したのは、この卒論調査の時に感じた複雑なものを、前職の5年目～6年目の頃に再び抱くようになったからです。

前職の鉄道会社は自然が多い区画にも線路が通っており、このため野生動物を目にする機会が多くありました。それだけなら良いのですが、しばしば接触して（ぶつかって）しまうこともあり、対象がシカやイノシシだった場合、安全確認による遅延が生じることがありました。

そうした野生動物——特にシカとの接触頻度が増えつつあるように感じ、我々は仕事で列車を動かしているだけ（シカへの害意はない）、シカは生活のために動き回っているだけ（人間への害意はない）なのに、お互いが不利益を被る事態が生じている……それを目の当たりにしている内に、せっかく大学で学んだ専門的な能力を宝の持ち腐れにしておくのは勿体ないなあと思うようになりました。

先に WMO に入社し働かれていた先輩が SNS

で何度か告知をされていたこともあり、その気持ちのまま、中途採用の応募に飛び込んだ次第です。

野生動物と直接的に関わることでそれ自体にブランドがありますし、考え得る限り覚えることが山積で、それ故に不慣れなことや至らない点が多々あるかと思いますが、一つ一つに精一杯取り組み向き合っていきますので、ご指導のほどよろしく願いいたします。



吹田市の旧車イベントにて。

◇ ◇ 大橋 茉奈 ◇ ◇

初めまして。福島事業所で非常勤事務員として働かせていただくことになりました、大橋茉奈と申します。趣味は、漫画、ゲーム、麻雀、ポーカ一、映画鑑賞、少しゴルフもやったりと幅広く色々なことに興味があります。よろしくお願いします。

生まれは福島県南相馬市です。福島事業所がある浪江町の隣の町です。小さい頃は、近所の小川でザリガニをとったり、虫取りをしたり、海へ釣りに行ってハゼを大量に釣ったり、夜にはカブトムシを捕まえに行ったりなんかもして、『THE 田舎』という感じの幼少期を過ごしました。そのころから動物は好きで、周りが自然豊かな場所だったこともあり、野生の猿や鹿（鹿は一度だけ）、野うさぎ、たぬき、ハクビシン等は割と目撃することも多く、動物自体が割と身近な環境で育ったと思います。

その後小中高と地元の学校に進学し平凡な毎日を送っていましたが、転機が訪れたのは高校二年

生の冬。2011年3月11日に発生した東日本大震災です。地震が発生したとき、私は友人とマクドナルドでハンバーガーを食べていたのですが、次第に揺れが大きくなるにつれ「店内は危ないので外へ出てください!」とスタッフの方に指示され駐車場に出た瞬間、自力では立てられないほどの揺れに襲われ近くにあった車につかまりながら揺れがおさまるのを待っていました。家に帰ると中はめちゃくちゃで、度重なる余震から倒壊の恐れもありとても住める状態ではありませんでした。その後津波が発生し、当時のことを一言で表すなら「地獄」。これに尽きると思います。津波が発生し、たくさんの死亡者が出ているというラジオの声、地元の高校の体育館が遺体安置所になり安否がわからない家族を探しに行ったら、次々と運ばれてくる遺体がどれも人間とは呼べない状態だったという友人の話、回線が混みあっていて「津波がくるから逃げろ」という連絡を最後に安否が分からなくなってしまった姉のこと（しばらくして連絡がつき無事に避難できていました）、寒い体育館で十分な防寒具もなく食料の支給物資は一家族に食パン一斤のみ、その間もずっと続く余震、寒くて不安で夜も眠れず精神的にも体力的にも限界でずっと泣いていました。その後原発事故が発生し、そこからまたさらに移動しての避難生活が始まるわけですが、長くなるので省略します。

その後何年かして地元に戻ることになり、映像制作の会社に入社しました。そこは震災後に地元にてきたテレビ局で、東日本大震災で大きな被害を受けた市民に対し、放送を通じて地域情報を送ることで地域の復興を支援することを目的として開局されたところでした。市の行事や生活情報、復興状況などを取材して放送したり、市の広報や市内の放射線モニタリング情報のデータ放送なども行っていました。その後色々あり退職することになり、求人情報を眺めていたらこの会社を見つけました。

最初は、「動物」というワードに目がとまり、なんだかおもしろそうだなあと思って会社のホーム

ページを見たら、とても地域貢献性の高い仕事をしている会社だということが分かりました。私は自身も被災者であり、地域復興の重要性を深く実感しています。そんな中、地域貢献性の高い仕事を通じて復興に少しでも携わりたいと考え、また、前職でもパソコンを扱う業務に従事しており、その経験を活かして野生動物の保護・管理に関わる業務のサポートをできればという思いから応募させていただき、今に至ります。未経験の分野で知らないことも多くご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、一日でも早く皆様のお力になれるよう精一杯努力いたしますので、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



動物と人間の共生をテーマに携帯で
絵を描いてみました



宮城蔵王キツネ村に遊びに行った時の一枚です。
太陽に照らされ神々しかったです。